

The message from

Y. Kazuki

Museum of Misumi

～美術館からのメッセージ～

文展特選作品

『兎』

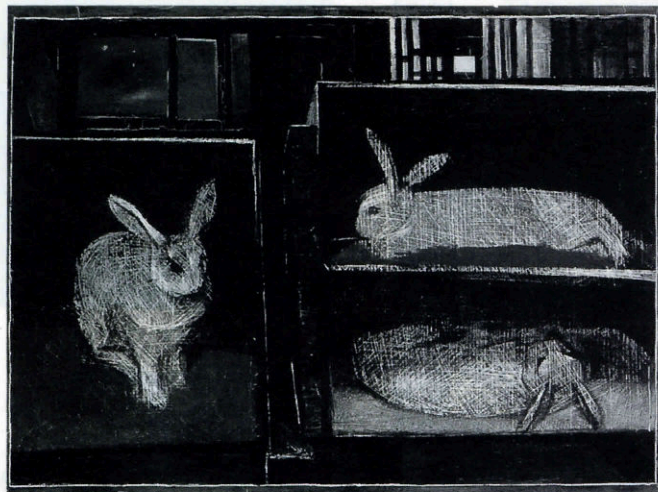
今月の作品は、画家として不動の地歩を築いたとも言える『兎』を紹介します。

画伯は昭和11年東京美術学校(現東京芸大)を卒業後、北海道の倶知安中学校(美術教師)に赴任。その下宿先の座敷で作品となった兎を飼い、家主に叱られたエピソードもあったと聞きます。

昭和9年「雪降りの山陰風景」でデビューした事は先月号で紹介

介しましたが、この頃は、画伯にとって最大のスランプであり、『兎』の原型がなかなか出来なかった様です。そして昭和13年画伯は故郷へ帰り、山口県立下関高等女学校に奉職。この年結婚。翌14年に「犬」「少年」で国画会奨学賞を受賞し、秋の文展(第3回文部省展覧会)に出品した『兎』が見事特選となりました。「これでようやく絵描きとして飯が食って行ける」と画伯のことばにあったようですが、特選をとった事で新進画家として幸運なスタートとなったのです。

しかしこの時、画伯は自分の一生を賭けたといつてよい程迷いに迷ったと聞きます。それは従前の手法で描いた手堅い「祖父像」で入選するか、構成的で新しい画境を独自に拓いた自分の生き方が認められれば特選がとれる『兎』を出品するか。結局、斬新かつ大胆な構図の『兎』を出品されたのです。この年に受賞した『兎』は下関高女に飼育されていたもので、この時代の画伯の絵画は、日常生活の中にある身の回りのものが多く、モチーフとして取り入れられているのです。



兎

1939年 73×100

風土的なものを基盤にして出発した香月泰男には、それを油絵で描くことの必然性を見いだす必要があった。とはいえ、すでにヨーロッパ近代絵画の影響を強く受けていた日本の近代美術を、いきなり白紙に戻すことはできない。また、香月が求めた風土性は、一般論としてのものである前に自信の感性に合うものでなければならなかった。香月はひとまず近代絵画のエッセンスをつかみ、それを使って自分独自のものを生み出すことに勢力を注ぐ。そこにはまた、人と同じことをしてはだめだという画家としての強い野心もあった。

平面的で立体的……果敢な挑戦

下関高等女学校に勤めながら描いた『兎』は、文展で特選になり、画家としての地位を認められた作品である。無難な作品で確実な入選を求めず、革新的な作品で挑戦した結果である。3枚の絵が組み合わされたような、平面的でありながら各部分は立体的な画面構成、背景の浮世絵的陰影、緑、藍、黄(金)という日本の古典芸術によく使われる色彩、そして兎の毛を引っ掻き線で表すことで、油絵のつやを消そうとする工夫など、近代造形と伝統的感性の間での果敢な挑戦が試みられている。

(下関市立美術館 濱本 聡学芸員)

▲(協力) 山口新聞社

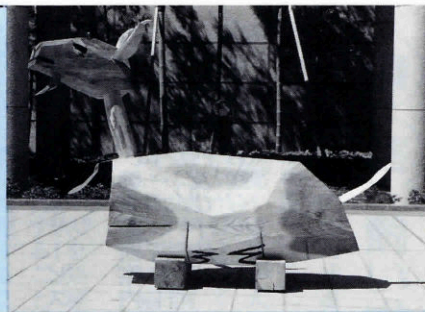
動物愛と平和への探求

私の「いほむ」展開催

平成7年7月1日(土)→9月24日(日)

■開館：午前9時～午後5時 入館は午後4時30分まで

■休日：毎週月曜日及び祝日の翌日



▲香月泰男のおもちゃ(レプリカ・山羊)